

意見陳述

2022年3月3日

原告1

原告1です。私は、北岡氏のセクハラ、パワハラそして性暴力行為に対する心からの謝罪と、長期間にわたり、余りにも悪質な人権侵害への精神的、身体的苦痛に対する損害賠償を求め、この訴訟をおこしました。

私が訴え出るまで、12年もの長い間、耐え抜いてきた理由は2つあります。

一つは、最初の被害にあった当時、私は27歳で、キャリアも社会的な立場もない一職員だったことです。北岡氏は、福祉業界で大きな影響力があり、組織の中でも絶大な権力を持ち、業務の指示も北岡氏の意見が絶対として役員層も服従していたので、仕事上での強い主従関係のもとで、私は耐え忍ぶ以外に、選択肢の無い状況に置かれていました。

二つ目は、障害者等の芸術文化を発信する仕事に、大きなやりがいを感じていて、私の人生の中で失うことのできないライフワークでした。甲127号証88ページのトゲトゲの作品は、陶器で作られ、この奇想天外な造形は世界の人をも魅了しました。128ページ～130ページの作品は落ち葉で折られた、たった2、3cmの動物です。このように障害のある作家たちによって創り出される独創的で、常識にとらわれない作品には、固定観念や、人や社会の評価など関係なく、あるがままに表現されています。これらの作品がつくりだす世界には、障害のあるなしに関係なく、一人の人間の個性に光をあて、私たち一人ひとりが誰とも代えられない尊い存在であることを伝える大きな力があり、夢中になりました。この分野に先駆的に取り組んでいたのは、グローや愛成会でしたので、この仕事を他にできる職場はなく、やりがいのある仕事を続ける為には、北岡氏のハラスメントや性暴力に耐える以外の選択肢はありませんでした。また私は展覧会を創る仕事に多く携わり、自分の素質や可能性を活かせる場所であった為、辛い仕打ちを受けても何とかこらえて、この仕事を続けていきたいという思いがありました。

長年、耐え続けたすえ、今回訴える決意をした最大の理由は、十数年間、北岡氏のハラスメントの行為と言動に対して、私は、一貫して「だめです」「やめてください」などの拒否の意思を伝え続けてきましたが、北岡氏は、嘲笑しながら、無視し続けました。

北岡氏の周囲にいる社会福祉の男性役員たちは、北岡氏のハラスメント行為を、その場に同席したり、見聞きしていても、誰も、問題視して対応することはありませんでした。

2019年に40歳になった私は、愛成会の幹部職員になっていましたが、北岡氏から受けてきた被害に、苦しみ、自分の尊厳を深く傷つけられている状況が続いていることに絶望して、これまで積みあげたキャリアを捨てることになったとしても、このような暴力を絶対に許せないと行動することを決心しました。

しかし、愛成会の理事会では男性役員たちからの猛攻撃にあい、私を解職させようとする動きもありました。とても不条理で、どの時点でどうあがいても救済されることはなかったのだと思いました。弱いもの、数の少ないものは暴力にあい続け、助けを求めても葬られる。現実はおぞましく、過酷です。

2012年に中野サンプラザで性暴力被害にあった後、北岡氏のハラスメント行為は常態化し、私は昼夜問わず執拗に狙われつづけました。私の寝ている時間までもが浸食され、すでに証拠も提出していますが、深夜1時半に「sexが終わったら、電話ください」と一方的にメールが送りつけられ、勤務中や勤務後に「抱かせて」、「身体が欲しい」などの性行為を直接的に求めるメールも届き、悪質なセクハラ・パワハラである以上に言語による性暴力そのものでした。北岡氏は、私の心情を慮ることなく、楽しそうに行い続けたことも恐怖でした。私は、一日が何事もなく無事に終わることをただ祈り、仕事を続けるためにサバイバルするのが日常でした。北岡氏のハラスメント行為は、いじめ、虐待、まるでリンチのように、人の尊厳をなぶりつぶすように繰り返され、人にそのように扱われた悲しみと恐怖は、ずっと心から消えません。

この訴訟で、北岡氏からの被害を明らかにする中で、今回追加主張で提出したショートメールの記憶が、私の頭の中で、抜け落ち、自分の心の崩壊を防ぐためにPTSDの解離性健忘が起きていたことが分かり、とても狼狽しました。被害の記憶を忘れないと自分を保てられないほど、深刻な精神的ダメージを今も尚、おっていました。ハラスメントなどの暴力行為を受け続けてきた人にとっては、被害はその一瞬ではなく、その後、何年もたった現在でも続いています。長年にわたり一貫して繰り返された大きな暴力行為であることをご理解いただきたいと思います。